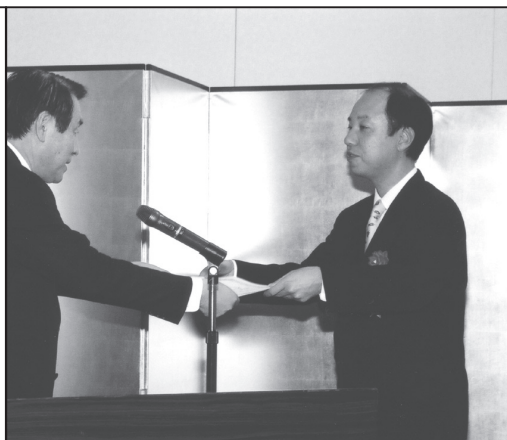


●優秀賞

学習意欲を喚起し持続させる「総合的な学習の時間」の授業と評価

茨城県守谷市立けやき台中学校 なかむらしんいち
中村進一



1. 研究主題

学習意欲を喚起し持続させる「総合的な学習の時間」の授業と評価

2. 主題設定の理由

(1) 「総合的な学習の時間」をめぐる課題から

平成 15 年 12 月 26 日、中学校学習指導要領が一部改正され、その内容の(2)として「総合的な学習の時間の一層の充実」が盛り込まれた。この一部改正は、中央教育審議会答申「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」(平成 15 年 10 月 7 日)を踏まえて行われたもので、答申では、全面実施されて 2 年たった「総合的な学習の時間」の成果と課題についても詳述されている。その中で今求められていることの一つが「評価の在り方」であり、この点について研究を進めることは、学習指導要領にある「総合的な学習の時間」のねらいを達成するために不可欠なものであると考えた。また、この答申では、[確かな学力]をはぐくむ上で、学習意欲の向上が重要な視点であり、「各学校において『総合的な学習の時間』等を通じて学びへの動機付けを図る」ことを求めている。さらに、学習指導要領一部改正のきっかけともなったいわゆる「学力低下」問題に答え、「総合的な学習の時間」の有効性を説明するためには、生徒自身が「わたしは総合でこんな力がつき

ました」と言えなければならない。このように生徒一人一人が身に付いた力を自覚するには自己評価力の向上を抜きにしては考えられない。従って、学習意欲と自己評価力の向上が、これからの「総合的な学習の時間」を進める上で、重要なカギになると考えた。

(2) 伊奈中学校の教育目標から

伊奈中学校の教育目標は「人間性豊かでたくましく生きる生徒を育てる」である。この目標はまさに[生きる力]をはぐくもうとするものであり、「総合的な学習の時間」の趣旨、ねらいと密接な関連を持つと言える。従って、教育目標の達成のために「総合的な学習の時間」が負っている役割は大きいと言えよう。また、[生きる力]をはぐくむことは、同時に生涯学習の基礎となる力(=自己教育力)を育成することに他ならない。そして、その自己教育力を支えるものは主体的に学び続けることができる学習意欲と自己評価の能力であると考えた。

(3) 生徒の実態から

伊奈中学校の生徒たちは、豊かな自然環境の中で伸びのびと学校生活を送っている。そのためか素直な生徒が多く、与えられた仕事や学習にはまじめに取り組むことができる。しかし、自ら進んで学習することに消極的であったり、困難な課題に対してねばり強く取り組んだりするこ

とが苦手な側面も持っている。総合的な学習の時間においても、オリエンテーションでの教師の話を中心して聞いたり、書物やインターネットでの調べ学習には進んで取り組む様子が見られる。しかし、体験を伴う活動や校外の人と関わる活動に消極的だったり、調査資料が見つからないとすぐにあきらめてしまうような実態もある。さらに、グループでの活動の際、中心になっている生徒に学習活動のかかなりの部分が集中してしまい、その他の生徒の学習活動が不十分なままになってしまうこともあった。このような実態から本研究主題を設定し、授業と評価という点から生徒一人一人の主体的な学習活動を促そうと考え、研究に取り組むこととした。

3. 研究のねらい

「総合的な学習の時間」において、授業展開と評価システムの工夫による生徒一人一人の『学び』への意欲を喚起し持続させることが、主体的に学び、自らの力を高めようとする生徒の育成に有効であることを、実践を通して検証する。

4. 研究の仮説

- (1) 総合的な学習の時間の授業展開を工夫し、評価規準を生徒と教師が共有して評価できるようにすれば、授業のねらいが明確になり主体的な学習活動を促すことにつながるであろう。
- (2) 「総合的な学習の時間」の評価システムを見直し、自己評価力を高めるための具体的手立てを講じていけば、生徒一人一人の『学び』への意欲を喚起し持続させることが可能になり、自らの力を高めようとする生徒の育成につながるであろう。

5. 研究の実際

(1) 指導と評価の一体化を図るための授業改善の取り組み

ア 「総合的な学習の時間」の手引き『チャレンジタイム』の改訂



●手引き『チャレンジタイム』第3版

伊奈中学校では、「総合的な学習の時間」が全面実施となった平成14年に合わせて、その手引き書である『チャレンジタイム』を制作し、授業で活用してきた。しかし、実際に使用してみると内容の上で不足していることがあったり、整合性に欠ける面があったので、平成16年に最初の改訂を行った（第2版）。その後、本研究の進行に伴い、年間指導計画や評価に関する記述等にも変更の必要性が生まれた。そこで、本年度再び改訂を行って（第3版）授業で活用できるようにした。

教師側の活用法としては、授業で用いるワークシートに「手引き」の参照ページを入れたり、オリエンテーションの際に「手引き」を使って説明したりしている。また、生徒は、校外学習やコンピュータ利用の「申請書」を、記入例を見ながら書いたり、「課題研究報告書」の形式を確認したりしている。本年度3年生へのアンケート調査でも（平成18年

9月、3年3組37名調査)、“チャレンジⅢ”で「手引き」を活用した生徒が100%という結果が出ている。

イ 単元の学習過程に沿った評価の観点

伊奈中学校の評価の観点は、①学習への主体的、創造的な態度、②課題設定の能力、③情報を集め、問題解決する能力、④記録・報告・発表する能力、である。この4項目は、単に観点を示すだけでなく、課題解決学習の過程において、どの項目で評価するのかという大まかな評価計画をも示している。①は、関心・意欲・態度の観点なので、常に評価すべき項目である。②は課題を設定し、学習計画を立てるまでの観点である。③は立てた計画に基づく調査研究の段階での観点、④は調査したことをまとめたり、発表したりする学習活動を評価する観点である。従って、実際の授業での評価の観点は、①のみ、①と②、①と③、①と④という4通りの組み合わせのいずれかになる。この観点の設定によって、評価すべき項目がぶれなくなり、ウの実践が容易になったといえる。

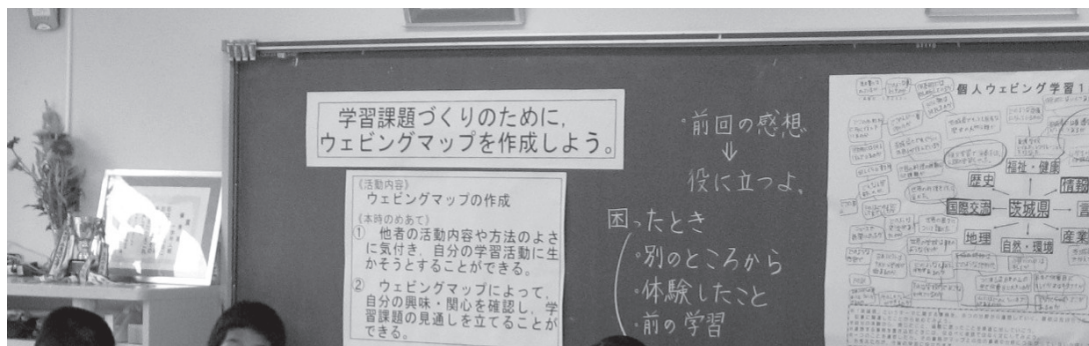
ウ 教師と生徒が評価基準を共有する授業展開

伊奈中学校では、個人評価カードを用いて、授業の最後の場面で自己評価を行ってきた。しかし、平成15年度までは、自己

評価の場面まで生徒は評価基準が分からない状態だった。そこで、平成16年度からは、その授業の評価基準を授業の最初に生徒と教師が共有できるような方策を立てることにした。各教科の授業過程を参考にして、以下のような方策を考え、学習過程を見直した。

すなわち、その授業の評価基準を、授業のはじめに「本時のめあて」として提示。生徒はそのめあてに向かって学習活動を行う。そして最後に「本時のめあて」が達成できたかどうかを評価基準に照らして自己評価するという学習過程を取るのである。さらに、「本時のめあて」は、本時の学習内容と共に黒板に掲示し、生徒がいつでも参照できるように配慮した。

この学習過程で授業を行うと、生徒は評価基準を理解して授業に臨むため、授業中目標を失わず主体的に学習できるようになった。また、教師と生徒が評価基準を共有した授業になっているため、個人評価カードの自己評価に対するコメントや授業中のアドバイスも焦点化され具体的なものになって、学習活動を進める上で直接役立つようになってきた。生徒の意識としても、導入直後(平成16年度1学期末)に実施したアンケートの結果、自己評価を学習に生かした理由として「『活動内容』や『本時のめあて』が授業のはじめに示されていたので、その日の目標や学習上のポイントがよく分かったから」



●学習課題・評価基準の掲示

改善した。

という項目を選んだ生徒が多く見られた。

さらに、生徒の「個人評価カード」の自己評価が、この学習過程を導入する前と後とでどのように変わったかを検証してみた(平成16年度1学期末、1年3組38名調査)。導入前の5月11日・18日の授業における自己評価で、Cのついた評価欄は合計12カ所あった。それに対し、導入後の5月25日・6月1日・8日・22日の自己評価では、C評価はわずかに3カ所であった。この結果を見ても、生徒たちが授業のねらいを理解し、主体的に学習に取り組めるようになったと言える。

(2) 学習と評価の一体化を図るための自己評価の取り組み

ア メタ認知的振り返りを可能にする「個人
評価カード」

自己評価力を向上させるには、生徒の「批判的思考力」を育てることで「メタ認知」(※)の形成を図り、それによって「メタ認知的振り返り」を可能にすることが重要である。「批判的思考力」を育てるためには、まず教師が「批判的問いかけ」を継続して行い、その批判的な役割を教師から生徒に段階的に轉移させていくことが有効であると考えた。この問いかけは授業の中で形成的に行われることも多いのであるが、伊奈中学校では授業の最終場面に「個人評価カード」を用いることで、全ての生徒にその機会を持たせようと考え実践している。

その方法は次のようなものである。①「個人評価カード」に記述された生徒の自己評価に対して、教師は「批判的問いかけ」を行う。②（次の授業までのなるべく早い段階で）その「問いかけ」に生徒が答える。このくり返しによって、生徒の「批判的思考力」は向上し、「メタ認知的振り返り」が可能になると考えられる。平成 17 年度後期には、この一連の活動がやりやすいよう、カードの形式も

この教師の「問いかけ」によって、生徒の自己評価の記述からは、単なる感想が減少して「メタ認知的振り返り」が多くみられるようになった。例えば、「今日の目標だった発表原稿を完成させることができた。発表資料にも取りかかることができたので、残り時間を考えながら効率よく学校や家で進めていきたい。」や「今後、どのように調査研究を進めるべきかを考え、計画を見直した。特に、栽培について確認した。」などといった記述が増えてきている。また、現在の「個人評価カード」が、改善前のカードと比較して役立っているかどうか、両方のカードを使用した経験のある3年生を対象にアンケート調査を行った（平成18年度1学期末、3年生110名調査）。その結果、「役立っている」「どちらかといえば役立っている」と答えた生徒が約75%いた。そして、その理由としては「先生のコメントやそれに対する自分の答えが、次の学習に役立つと思うから」や「先

[illegible]

●現在伊奈中学校で使用している「個人評価カード」

分野	分野別番号	課題	生徒規準③(情報を集め、問題解決する能力)			生徒規準④(記録・報告・発表する能力)		
福祉・健康	フー2	高齢者や障害者の方々が伊奈地区で生活するうえでの課題点を調べ、より暮らしやすいような改善策を考える。	・インターネットを通して、高齢者や障害者の方々のためのリハビリについて調べることができる。	・体験活動やインタビューを通して、生活する上での課題点について調べることができる。	・問題点を調査した上で、現在の対策について考察し、より暮らしやすい改善策を考えることができる。	・得られた結果を根拠に、伊奈地区の問題点や改善策を伝えるためのポスターや発表原稿を作成することができる。	・発表会では、作成した改善策を聞き手に分かりやすくはっきりとした声で発表するとともに、質問に適切に応じることができる。	・具体的な改善策をまとめる必要性和その内容が読み手に見やすいように、図や表を使って研究報告書を作成することができる。
福祉・健康	フー3	様々な発酵食品を調べ、健康増進の視点から、それらの利用法について考える。	・インターネット、書籍を使い、発酵食品の悪い点、良い点を知り、健康にどう生かすかを調べることができる。	・インタビュー、体験活動を通して、家庭でも簡単に作れる発酵食品を調べることができる。	・発酵食品の良さを知ったうえで、健康増進のためにどのように利用すればよいか考えることができる。	・得られた資料をもとに、発酵食品で健康を増進するための結果をまとめたポスターとパンフレットを作成することができる。	・発表会では、発酵食品の利用法を聞き手にちゃんと理解してもらえよう。試食や写真を使って発表するとともに、質問に適切に応じることができる。	・健康増進のための発酵食品の利用法が読み手によく分かるような研究報告書を、「太郎」を利用して作成することができる。
福祉・健康	フー4	介護施設の利用者の視点から、介護施設の改善策を考える。	・インターネットや本を利用して、介護の仕方・役割・大切なことについての知識を深めることができる。	・現地調査やインタビューを通して、介護施設の実態やそれに対する対策を調べることができる。	・介護施設の現状を知った上で、問題点について考え、それをもとに具体的な改善策を考えることができる。	・得られた結果を根拠に、介護施設の改善策を伝えるためのポスターセッションのポスターと発表原稿を作成することができる。	・発表会では、介護施設の改善策を聞き手に大きな声で分かりやすく発表するとともに、質問に適切に応じることができる。	・具体的な介護施設の改善策が読み手によく分かるように、図や表を使って研究報告書を作成することができる。
福祉・健康	フー5	伊奈地区の福祉施設を利用者の視点で見つめ直し、改善策を考える。	・体験やインタビューを通して、お年寄りにとって不便なところを改善する設備などを調べることができる。	・不便なことを知った上で、まず自分で行うことができることを考え、よりお年寄りに効果的に具体的な改善策を考えることができる。	・本やパンフレットを見て、改善策や設備の工夫点を知ることができる。	・得られた結果を根拠に、福祉施設を利用しているお年寄りにとって不便なところや改善策を提示資料にまとめることができる。	・発表会では、福祉施設の改善策を聞き手に分かりやすく発表するとともに、質問に適切に応じることができる。	・福祉施設を利用しているお年寄りにとって不便なところや改善策を、研究報告書にまとめることができる。
福祉・健康	フー6	医療機器を装着している人への支援の在り方考える。	・体験やインタビューを通して、医療機器を使用している人への苦勞や要望を調べることができる。	・インターネットを通して、医療機器や使用している人への現在の支援を調べることができる。	・使っている人の苦勞や要望、現在行われている支援を知った上で、より効果的な支援を考えることができる。	・得られた結果を根拠に、医療機器を装着している人への支援の在り方を考え、ポスターにまとめることができる。	・発表会では、作成したポスターを提示し、聞き手に分かりやすく発表するとともに、質問に適切に応じることができる。	・医療機器を装着している人への支援の在り方がよく分かるように、写真も交えた研究報告書を作成することができる。
福祉・健康	フー7	高齢化社会での住環境について調べ、お年寄りが暮らしやすい住居に必要な条件を考える。	・インターネットやインタビューを通して、高齢化社会の進行に伴う住環境の変化について調べることができる。	・住居の変化や現在の問題点を知った上で、お年寄りが暮らしやすい住居の条件を考えることができる。	・体験やインタビューによるリハビリの実態や利用者の気持ちを知った上で、改善策を考えることができる。	・得られた結果をもとに、お年寄りが暮らしやすい住居に必要な条件を新聞形式で分かりやすく作成することができる。	・発表会では、お年寄りが暮らしやすい住居に必要な条件を聞き手に分かりやすく発表するとともに、質問に適切に答えることができる。	・お年寄りが暮らしやすい住居に必要な条件が理解してもらえよう。インタビュー結果を交えた研究報告書を作成することができる。
福祉・健康	フー8	車イスでの生活の問題点を体験し、それを改善するために必要なことを考え、提案する。	・実際に車イスに乗り、利用者にインタビューを通して、車イス利用者の気持ちやリハビリの実態を知ることができる。	・車イスの種類、性質を調べた上で、その車イスにあったリハビリを考えることができる。	・体験やインタビューによるリハビリの実態や利用者の気持ちを知った上で、改善策を考えることができる。	・発表資料作成の際は、体験結果や調べたことをパンフレット・模造紙・画用紙に見やすくまとめることができる。	・発表会では、今まで活動してきた写真を示しながら聞き手にはっきりと伝えることができる。	・これまでの調査資料をもとに、車イス生活での改善点をまとめ提案することができる。

●個人の学習課題及び作成した生徒規準の一例

生のコメントによって、自己評価すべきポイントが分かってくるから」という答えが大変多かった。このことから、生徒が自己評価の意義を認め、それを学習活動に生かそうとしていることが分かる。

※「メタ認知」とは・・・
認知に対する認知。すなわち、見る、聞く、書く、話す、理解する、覚える、考える、といった通常の認知活動をもう一段高いレベルからとらえた認知を指す。たとえば、英語の文章をいっしょうけんめい繰り返して覚えるのは、単なる認知活動である。これに対して、「文意を十分に理解してから覚えた方がよく覚えられないのではないか」と考えたり、「自分のペースだと、3日に分けて覚えるのがちょうどいい」と判断したり、あるいは自分の学習を点検してみたりするのは、メタ認知的活動といえる。さらに、「今日の目標だった発表原稿を完成させることができた。発表資料にも取りか

かることができたので、残り時間を考えながら効率よく学校や家で進めていきたい」や「今後、どのように調査研究を進めるべきかを考え、計画を見直した。特に、栽培について確認した」といった、メタ認知的活動を伴った振り返りのことを、「メタ認知的振り返り」という。(鳴門教育大学学校教育実践センター「コラボレーションネットワーク」HPを参考に作成)

イ 個人内評価と目標に準拠した評価の関連を図り、評価規準を個別化する「生徒規準」

生徒の自己評価は、発達段階や経験、性格からの影響を受けやすく、往々にして「主観的」で「偏り」を持つものである。伊奈中学校ではこのような自己評価の持つ短所を意識して、より「客観的」で「信頼」できる評価の構築を目指してきた。その結論として平成17年度後期から取り組んでいるの

が、生徒一人一人の評価規準（＝伊奈中学校では「生徒規準」と呼んでいる）を作り、それによって自己評価をしていくという方法である。「生徒規準」は一人一人異なるのであるから、それによる評価は個人内評価である。同時に、はっきりとした規準があるわけであるから、目標に準拠した評価でもある。「生徒規準」によって自己評価を行うことは、評価規準の個別化を図り、生徒一人一人の「学習と評価の一体化」をもたらすと考えられる。

「生徒規準」を用いて「チャレンジⅢ」の学習活動を行ってきた3年生に、中間発表会が終わった段階でアンケート調査を行った（平成18年度1学期末、3年生110名調査）。まず、「生徒規準」が自分の学習を進める上で役立っているかどうかを尋ねたところ、「役立っている」「どちらかといえば役立っている」と答えた生徒は、あわせて78%であった。

その理由としては、「自分の課題にあった規準なので自己評価がしやすい」が圧倒的に多く、「生徒規準」が自己評価をする上で欠かせないものになっていることが分かる。

また「生徒規準」には、それを全て達成した状態が、それぞれの生徒の「学習のゴール」になるという特徴がある。従って、教師は、指導の際にそれぞれの生徒の「生徒規準」を確認することで、当を得た助言を行うことができる。このように、「生徒規準」は、指導者側にとっても有益なツールとして活用できるものである。

ウ 自己評価を補完し、「学び合い」を促進する相互評価

自己評価の「主観性」の是正のためには、「生徒規準」の他にも、他者評価や相互評

チャレンジⅢ (WS)



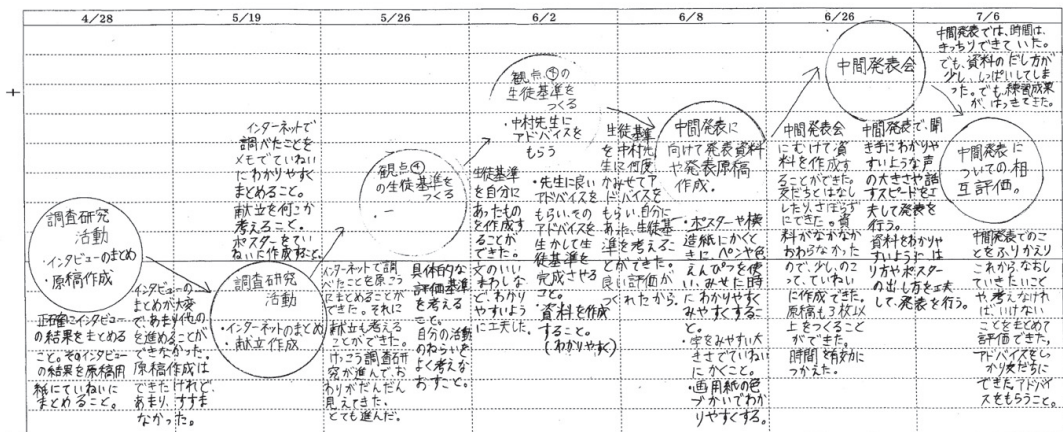
1 学期の学習履歴図を作ろう

<学習日：7月12日>

1学期の「チャレンジⅢ」の学習が終わろうとしています。今学期は、「チャレンジⅢ」の調査研究を中心に、中間発表会とその後の話し合い（相互評価）まで、学習を進めてきました。各自が「生徒規準」を用いて、自分の学習を振り返りながら、学習のゴールである、課題解決に向けて努力したこととします。今日は、4月からの学習の様子を「学習履歴図」にすることで、学習の反省をすると同時に、今後の見通し（特に、夏休みに何をすべきかを確認）を持てるようにしていきます。

<学習履歴図の作成手順>

- ①○の中に、その日の活動内容を簡単に書く。
- ②その日の活動の様子を一つの横線で表す。
- ③その日の活動のめあて、課題の解決に近づいた。（上向きの矢印）
- ④行き詰まっている、課題の解決に近づいていないと思える。（下向きの矢印）
- ⑤④の下に、なぜその横線にしたのか理由を書く。
- ⑥①の下に、その日の「個人評価カード」や学習記録から、自分の学びにとって重要だと思われる事柄を書き出す。
- ⑦書き終わった後、全体を眺めて気づいたことや、夏休みに取り組まなければならないことを考えながら図に記録する。（夏休みに取り組まなければならないことは、自分の学習計画や先週の相互評価用紙も参考にしておくこと。）



ー全体を眺めて気づいたことー
・バランス良く進められていると思う。活動は、おこなっているものはないので、このまま、がんばれば良い。チャレンジⅢは、真面目に全体的でできたと思う。中間発表会まで、しっかり進められたと思う。

ー夏休みに取り組まなければならないことー
・健康に配慮した食事を何日間分かを考え、それを実際に作ってみる。
・料理をついている人にインタビュー。（お母さんと。）

●学習履歴図の例

価を組み合わせる方法が考えられる。伊奈中学校では、学習課題の検討の段階、中間発表会やその後の振り返り（学年反省会）の段階、さらには最終発表会等で自己評価と組み合わせ活用している。特に「相互評価」は、単に自己評価を補完するだけでなく、生徒同士の「学び合い」を促進し、課題を追求するための前向きな学習集団を創り上げるという観点からも重要視している。具体的には、単に「相互評価」だけをするのではなく、「自己評価と相互評価の比較（自己評価をしてから相互評価を知り比較する）」や「相互評価を生かした自己評価（相互評価を知った上で自己評価を行う）」といった組み合わせ方が重要だと考え、実践している。

エ 中・長期的なポートフォリオ評価が容易に行える「学習履歴図」

「学習履歴図」は、市川洋子氏が自己評価力を高める方略として提案しているものである。伊奈中学校では、①で述べた「個人評価カード」を実践しているので、「学習履歴図」の持つ「それまでの学びを俯瞰する」という機能を生かし、ある程度まとまった活動の後で、「個人評価カード」をもとに学習履歴図を書くようにした。この作業を行うことにより、生徒はそれまでの学びを俯瞰すると同時に、その後の学習活動を見通し調整する（フィードフォワード）ことができると考えられる。従って、ワークシートを作成する際にも、これらの考えを生かし、単に「学習履歴図」を書くだけで終わらないように工夫した。そして、作成したワークシートを使って、担当教師との面接評価や生徒間の相互評価の時間を組み合わせていけば、メタ認知形成の手だてとして有効であり、生徒の自己評価力の向上や学びの広がりにつながっていくものと考え。毎時間の「個人評価カード」による自己評価のくり返しは、

一方でマンネリ化する危険性を持っている。学習履歴図の導入は、それを防ぎ、中期的・長期的なポートフォリオ評価を容易にするのである。

オ 生徒自身が「学び」の足跡を記す「通知表」

伊奈中学校では、前述した(1)～(4)のような手だてを用いて自己評価力の向上を図り、それによって主体的な学び手としての生徒を育てようとしてきた。しかし、通知表はというと、評価の観点に基づいた教師の所見があるだけで、せっかくの取り組みが生かされていなかった。そこで、今年度から通知表の形式を一新し、生徒の自己評価を盛り込んだ通知表を作成した。新しい通知表では、「学習課題」「主な学習活動内容」「自分の学びの成果」を生徒自身が記述する。（このとき役立つのは、「個人評価カード」や「学習履歴図」・発表会の際の「相互評価」といった評価記録をはじめとするポートフォリオであることは言うまでもない。）その上で、指導担当教師が所見を記入することで、生徒一人一人の「学び」の足跡が概観できるものとなっている。

6. 研究の成果及び今後の課題

(1) 研究の成果

ア 授業のはじめに「評価規準」を生徒と教師が共有することにより、その授業の目標が明確になり、生徒は先を見通して学習できるようになった。学習活動を途中で投げ出したり、意欲が著しく減退する生徒がほとんどいなくなり、授業の目標を達成できるようになった。これは、言い換えれば、自らの意志・判断で学ぶ「主体的な学び」ができるようになったと考えられる。

イ 自己評価力の向上を目指した様々な手立てを行うことで、「メタ認知的振り返り」が次第にできるようになり、自己評価力の向上が見られるようになった。

個人評価カードの記述では「楽しかった」とか、「資料がなかった」などの単なる振り返りはほとんどなくなった。記述量も増えているし、先を見通した記述（例えば、「次の時間は〇〇をする」や「予定まで終わらなかったのて家で△△をしてくる」など）が見られるようになってきている。これは、「生徒規準」によって、一人一人の学習活動に応じた評価ができるようになってきていることも、良い影響をもたらしていると考えられる。

従って、自己評価力を向上させることは、「学び」への意欲を喚起し持続させることに有効で、主体的に「学ぶ」生徒の育成に必要な条件だといえる。

(2) 今後の課題

ア 生徒の変容やアンケート結果から、「自己評価力」の高まりは実感できるようになった。しかし、それを検証する客観的なデータを示すのが難しい。伊奈中学校で実践した自己評価力を高める手立ては、一部の生徒にとっては、「難しい」ことだったり「面倒」なことだったりする。従って、アンケート結果が、生徒の「真正な」姿を示しているとは考えられない場合もある。今後は、自己評価力をどのように検証していくのかを、さらに研究する必要がある。

イ 「主体的な『学び』」を実現するためには、他との関わりが不可欠である。特に、生徒同士の「学び合い」を促進していくことは、自己評価力を高め、主体的に学ぶ学習集団を組織する上で重要である。現在意識して取り組んでいる相互評価だけでなく、その他の学習の過程・場面においても、いかに「学び合い」を組織していくかという点について、研究を深めたい。

<参考文献及び参考にした web site address >

- ・ 愛知県幡豆郡一色町立小中学校 編
『小中学校一貫の総合的な学習の時間の教育課程の編成と体系的な評価』
文部科学省指定「研究開発学校」研究紀要（2004）
- ・ 寺西和子
『確かな学力を育てるポートフォリオ評価の方法と実践』
黎明書房（2003）
- ・ 黒澤俊二
『本当の教育評価とは何か』
学陽書房（2004）
- ・ 鳴門教育大学 学校教育実践センター
「コラボレーションネットワーク」
<http://rcse.naruto-u.ac.jp/cgi-bin/collabonet.cgi>
- ・ 市川洋子
『総合的な学習で自己評価力をつける』
明治図書（2004）
- ・ 上杉賢士／市川洋子
『プロジェクト・ベース学習で育つ子どもたち』
学事出版（2005）